

苦しみが共有されてこそ

主任司祭 吉池 好高

2011年のあの日から一年が経ち、3月11日が巡って来ようとしています。「復興元年」の掛け声が流れる中、それがいかに苦しくとも、いかに非生産的と思われようとも、私たちの眼はあの日を凝視し続けなければなりません。私たちのこの一年が、あの日とどのように結ばれ、どの程度関わっていたかを顧みなければなりません。それが今年の私たちの四旬節の課題です。

四旬節は回心への呼びかけの時です。そしてそれは、私たちの信仰が常に私たちに求めている、私たちの心のあり方を指し示す呼びかけです。私たちの信仰が私たちに求めている回心は、主イエス・キリストの十字架のもとに立ち帰ることを呼びかけています。主イエス・キリストの十字架において示された苦しみの神秘を見つめるよう私たちに招いています。

生きてゆくためには立ち上がらなければなりません。そのためには、歯を喰いしばってでも前を見つめなければなりません。「復興」は私たち皆の心からの願いです。けれども、復興への掛け声が真の復興に繋がるためには、十字架の下に立ち返らなければなりません。十字架において示された苦しみの神秘が私たちに共有されなければなりません。復興が進まないのは政府や行政の責任だけではありません。苦しみの神秘が私たちに共有されなければ前進はありえないのです。

私たちの主イエス・キリストは見捨てられた人として十字架の上に死んでゆかれました。回心はその十字架上からの呼びかけです。けれども、私たちはその十字架の前を不安気に、十字架から目をそらすようにして、急ぎ足で通り過ぎようとしているのかもしれませんが。復興の掛け声と、私たちの復興への願いがそのようなことになってしまうなら、私たちはまたもや私たちの主が身をもって示してくださった十字架の神秘の前を素通りしてしまうことになりかねません。十字架の神秘は、私たちがそれをともに担うことなしには、啓示されることはありません。自分たちの身の安全だけを考えていたのでは、被災地の方々の声となって叫ぶ十字架の主の御声は私たちの耳には届かないのです。